

# 第19回

## 秀麗富嶽十二景写真コンテスト

### 入選作品

最優秀賞

染まる雪陵

内藤 均（山梨県南アルプス市）

ハマイバ



白簾史朗氏講評

破魔射場に降った新雪の山稜を前景に左奥に富士山を配した構成はバランスよく、前後の形もよい。まこと最優秀賞にふさわしい出来栄であり、色彩の調子も良い。ただ惜しむらくは手前（下部）の雪面が写り込んでいるのが蛇足といえ、これを省いての構成であつたら更にすばらしいものとなつた。望むらくはあと数十秒経過してのシャッターなら、富士山の光が強まり、より山体が浮き出したと考える。

推薦

湧雲迫りて

高橋 英子（東京都大田区）

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簷史朗氏講評

9月でもあり、新雪の山姿は望むべくもなかったが、沈んだ富士山の山体に輝かしい雲海が実に美しい対照を成している。ことに中央・富士山の手前の雲塊の形は実に美しく、空部の澄みもまた秋の大気を感じさせて清々しい。仲々撮り難いこの撮影地からの秀作として、いままでに無い、富嶽十二景にふさわしい格調の好作といえよう。



推薦

朝霧に咲く 村上 敏幸（山梨県大月市） 御前山



白簾史朗氏講評

ガス巻く中景の感じが、手前のコメツツジ?の花を際立てて遠景の富士山と対している。柔らかい調子がいかにも低山的な感じを生ぜしめて、撮影者の富士山を愛する心情をみごとに描写していると思う。こうした場合、富士に少しガスがかかっているだけでも気にならない。しかし、手前の花のピントには注意。

特選

秋盛り 大戸 康世（山梨県大月市） 百蔵山



白簾史朗氏講評

あざやかな紅葉が、枝もたわわに垂れ下がり、その間隙に新雪の富士山がのぞく。色彩の対照の妙、鮮烈な感じが際立っている。やや右上の枝が重く、紅葉も少し多すぎで秋の爽やかさが減じている。紅葉がもう少し少ないと秋らしくすっきりとしたことと思う。だが、久しぶりに盛りの秋といった作品である。調子を少し弱目にすれば、強烈な感じが薄れて爽やかになるろう。

特選

山並の彼方に 伊藤 恵子（東京都大田区） 百蔵山



白簾史朗氏講評

下部の樹影、中間部の薄雲、鮮やかな遠景の富士山。三者がみごとに調和してバランスもぴったりと合っている。だが、これで下部の樹影が欠けると中間部の弱さが富士の強さに負けてしまう。そうなる横位置にしても救えない。何の変哲もないように思える、この小さな黒い樹影、この場、最も重要な位置を占めて役目を受け持っている。富士の朝焼けも色薄い、これもバランスのひとつを受け持っている。



特選

雲表に座す 山下 政明（神奈川県秦野市） 雁ヶ腹摺山



白簷史朗氏講評

堂々たる山姿であり、豪快なバランスで思い切りよく切り取っている。上部の感じはよいが、中間部の黒い空きと真ん中の白雲、平坦な山背が少し気になる。それと全体の色調がマゼンタ（赤）かぶりしているのは注意点。これは引き伸ばし時のカブリである。本来はもっとすっきりした感じであったろう。

入賞

晩秋の朝 村上 敏幸（山梨県大月市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

全体に赤カブリがあり、一見朝焼け時の撮影に思えるが、手前の色調と富士山の山腹の浅さが不自然であり、富士山の雪の白調子を失ってしまった。これは暗黒部の強調しすぎた反動であり、不自然さがぬぐえない。せっかくの好作も一瞬のミスが致命傷となる。DPは調子にくれぐれも注意をうながしたい。構図的には下部がやや多いことが気になるが、上部の切り方は良い。



入賞

秋望

奈木 正次（山梨県大月市）

姥子山



白簾史朗氏講評

富士山左下部の送電塔がちょっと気になるが、これは致し方ないと思う。十重二十重に重なる山ひだの紅葉が実に美しい。これで富士山に新雪があったら、と惜しまれるが、これは期待するのが無理であろう。いずれにしてもこの奥地からの眺望はこれ一点のみの応募であり貴重な作品である。次回は送電塔を除いての構成と手前の尾根の影の処理を心がけて欲しい。

入賞

秋晴れ 池田 浩樹（山梨県大月市） 小金沢山



白簾史朗氏講評

ススキに紅葉、青い富士山。秋の色彩を前景に、こよなく晴れた大気の色を吸った富士山との色彩の対比があざやかである。しかし、富士山の青が少々強すぎて秋の感じが薄れてしまっている。紅葉とススキの小道具はあっても、全体の調和が失われてしまった。あまりにも晴れすぎた故の気象のいたずらといえよう。次回は注意のこと。



入賞

波濤の如き雲の上に 小谷 哲朗（三重県松阪市） 牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

推薦の高橋英子氏の作品と似ているが、雲の調子が少々弱く、雲の形もおとなしい。全体のバランスとしては美しく気品があるが、少し調和を乱した方が感じが強くなることも撮影時に考える必要がある。もう少し四方を切って（ことに左方と下部）、全体を大きく、画面内に捉えるとグッと強くなる。



入賞

厳冬の朝 大戸 康世（山梨県大月市） 大蔵高丸



白簷史朗氏講評

新雪が積もった叢林を雪が覆っている光景であるが、あまり雪がびっしりついているので凹凸が目立たなくなった。もう少し近づいて雪の頂点やや左を切り、右は富士山の稜線の半分、上部をそのまま、下部も雪の半分をカットすればゲンと強い構図となる。いわゆる無駄な部分をカットして主題を強調する手法をとりたい。

入賞

雲のジュータン 井上 儀宏（東京都町田市） ハマイバ



白簾史朗氏講評

題名の付け方が適切でない。この作品のテーマは富士山であり、紅葉である。稀に紅葉はもっとも大きな面積を占めていて一番目立つ。雲などはまことに小さな存在でしか無い。ここでは左方の枝を切り、下部も半分切って富士山を引っぱり出し、右方の影も半分切って紅葉を強調する。まったくちがった作品となるが、それによってすぐれた作品となるだろう。



入賞

雪肌光る 奈木 正次（山梨県大月市） 滝子山



白簾史朗氏講評

題名に拘わりすぎたか、それとも左方の雲を切れなかったか、そのため双方が不十分な説明となった。この場合、左方の雲の形に捨てがたいものがあり、「雲踊る雪肌」のようなテーマが生きる。山頂の右方が下がっているのを直せば、雲はさらに立ち上がる。ここでは山頂の高さを気にせず、雲を気にすべきだと思う。山肌はさほど大きく光っていないからである。



入賞

枝木に咲く

愛澤 和弘（埼玉県所沢市）

笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

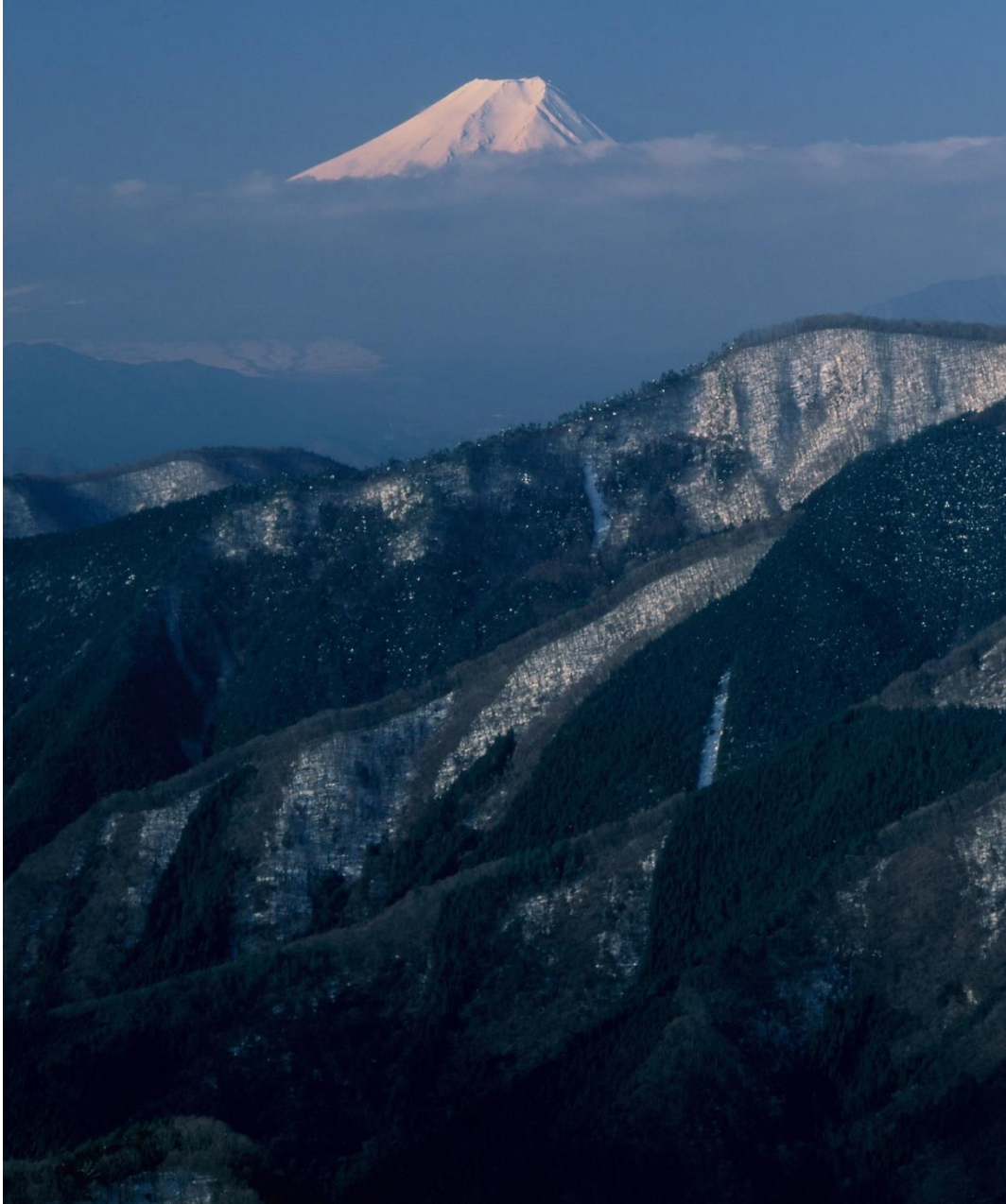
題名から見ると、枝木という名称は適切でない。「雪玉の彼方に」という形容の方が感じが出ると思う。こうした場合、雪玉から富士山を外さず、富士山に雪玉の付いた枝をかぶせて、その間から富士山をのぞかせるような手法の方が効果的と考える。雪玉から外れた山肌の雪の白さを富士山の白さを阻害しているのもいけない。

入賞

春雪のかなたに

小池 満雄（静岡県沼津市）

奈良倉山



白簀史朗氏講評

縦位置に構図をとると確かに富士山の高度感が増して見える。しかし、その分、この山からでは下部が多すぎて富士と比較すると富士山の方が小さくなる。光の当たった山肌が適当に存在するのを利用して、ここでは横位置の方が適当であり、バランスもよくなったと思う。

入賞

黎明の刻 高津 秀俊（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

これまた美しい富士山であるが、惜しむらくは富士山が小さく表現されているため、前作より迫力に欠けたのは致し方ない。だが、調子は美しく、殊に富士の麓の靄の感じは絶品といえる。これをもっと大きくフレーミングすると迫力は申し分ないものとなったろう。惜しい作品であった。



入賞

薄紅に明ける

村上 敏幸（山梨県大月市）

百蔵山



白簾史朗氏講評

光の扱い方がよく、下部のデテールが消えて、富士山が実際より高く幽玄に見える。端正な富士山であり、光の調子も良い。こうした場合「薄紅（べに）」という形容はあまり良くない。薄い、という形容は濃いという形容より弱い印象をあたえることが多いので、あまり使用せず、何か他の形容詞（例えば くれない）に変えた方が望ましい。

入賞

春爛漫

加藤 公男（山梨県大月市）

岩殿山



白簾史朗氏講評

題名通り受け取ると、「爛漫・・・」という感じとは遠くなる。こうした場合、「満開に対す」とか、「花富士」というような簡単なものの方が適切に思える。前者であるなら、もっと一面に濃く咲いていなければならない。また、まだ朝の色づきが富士山に残っているためか、富士山の雪が赤いのも損をしている。富士山の雪は、日中には純白であるべきで、題名もそれにともなって変える。

入賞

暁の富士高し

小谷 加代子（三重県松阪市）

お伊勢山



白簀史朗氏講評

壮大な感じの表現である。富士山の大きさと下部の黒部との比率がまことによくマッチしているため、富士が大きく表現されたといってよい。露出値も適正で、色彩再現もみごとである。高度感もあるのは上部山頂の切り方、すなわち上部の空の少なさによるが、これ以上せまくすると逆効果となるので注意。



入賞

冬晴れの朝

松本 邦弘（埼玉県入間市）

倉岳山



白簾史朗氏講評

樹木が繁茂して撮り難い山頂にめげずに通い、作品をものにされる執念に感服の他ない。今回は樹枝の繁茂を逆手にとり、下方から狙って、上方に冬枯れの枝先を配した表現で撮影地のマイナス点を逆に利用した。まだ暗い冬の空の暗さと、とくにひろがる枝先によって富士の色づきを強調、みごとな返し技といえる。

入賞

変化する怪雲

愛澤 和弘（埼玉県所沢市）

高畑山



白簾史朗氏講評

「変化する・・・」は蛇足であった。ここはただ「怪雲」だけで充分であろう。ことに雲に色付きのあったことがより効果的である。山体の大きさも適切であるが、山頂付近の登山道がハッキリしすぎて、この点のみ残念に思える。作者は近来、自分の表現のコツを会得したかに見え、急激に浮上してきた。波に乗る、ということであり、この調子でがんばって頂きたい。

入賞

月明かり 権正 光夫（山梨県富士吉田市） 九鬼山



白簾史朗氏講評

これまた撮り難い山、山頂からでなく、少し北にのびた尾根からの撮影であろうと思うが、少々露光オーバーの点が気になる。眼下にひろがりのびる都留の集落・市街を前景に、富士山を月明りで青く浮かび上らせた技術は中々のものと推賞する。このような工夫することによって撮影の難所も次々と陥落して行く。



入賞

秋色 高津 秀俊（山梨県大月市） 御前山

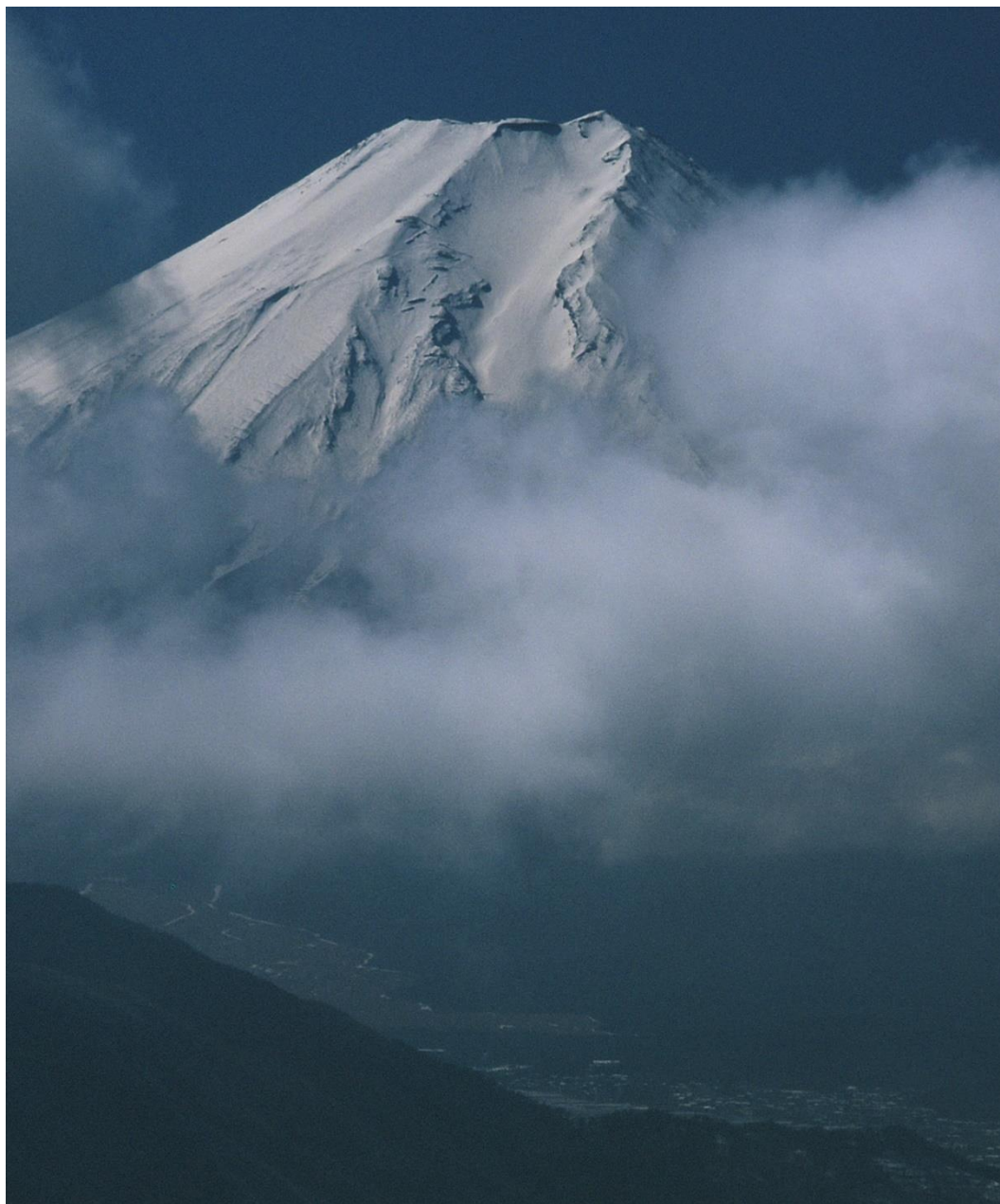


白簾史朗氏講評

みごとな秋色である。色づいた尾根の斜線上に富士山が鎮座する。左方にたな引く雲も美しく、中々に出会うチャンスではない。ただひとつ、気になる点は左方に盛り上がる山頂、多分九鬼山と思われるが、この黒い山頂と左下方の影となったところが重く、画面を重苦しくしてしまっている。左方の黒い山のコルから左方を切り捨てるとまったく違う作品となる。

入賞

雲ゆきて富士高し 瀬瀬 浩恭（岐阜県多治見市） 高川山



白簀史朗氏講評

勇壮な富士山である。この作品は下方を切って横位置という手もあるが、やはり縦位置の方が富士が高くぬきん出る感じが強く出る。欲をいえば雲の形がハッキリしないので弱い、この雲がもっと形がハッキリすれば勇壮が豪壮の字と変化する。そうした形もぜひ狙って頂きたい。

入賞

烈風に明けゆく 山下 政明（神奈川県秦野市） 清八山



白簾史朗氏講評

烈風というには雪煙の吹き流れが少し物足りない。本来の烈風は富士山の山肌を水平に走るものだが、そうしたチャンスにぶつからねば難しい。そこで一法として、富士山頂の雪煙のところのみ、大きく切り取る（トリミングする）ことによって、雪煙が吹き流れるさまが強く表現される。ただし、富士山をどのように切るかが問題となる。



入賞

紅雲の朝 谷口 一只（埼玉県加須市） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

この題では、平凡でインパクトに欠ける。こうした場合は「紅雲上空に在りて」というふうに少しひねった方が効果が出る。紅雲も少々ハッキリした輪郭がないので印象弱いところが残念である。雲と空との境が画然と分かれるようなチャンスに、ぜひ試みて頂きたい。

## 総評

審査員長 白簾史朗

今回は、最優秀賞、推薦、特選、入選すべてを併せて26名ということになる。入選者の都道府県でいえば、地元大月市が最も多く11名、次いで埼玉県が4名・東京都が3名・神奈川県と三重県が2名、山梨の南アルプス市と富士吉田市が各1名、静岡と岐阜も各1名と分類される。

最優秀賞は南アルプス市の内藤均氏、氏は一昨年も最優秀賞を獲得している。推薦は大月市の村上敏幸氏と東京都の高橋英子氏、特選は大月市の大戸康世氏と東京都の伊藤恵子氏、それに神奈川県秦野市の山下政明氏の3人。入選は推薦の村上敏幸氏が二点、特選の大戸康世氏と山下政明氏が各一点、奈木正次氏と愛澤和弘氏、高津秀俊氏が各二点、他の（池田浩樹、小谷哲朗、井上儀宏、小池満雄、加藤公男、小谷加代子、松本邦弘、権正光夫、瀨瀨浩恭、谷ロ一只）の各氏が各一点ということになった。

総入選数は26点という多きにわたったが、これは指定された山の作品を特定の応募者のみが出品したり、複数の山の撮影地が二つあったりする為と特別入選（最優秀賞・推薦・特選）が6点あるためである。（例：雁ヶ腹摺山と姥子山、小金沢山と牛奥ノ雁ヶ腹摺山、大蔵高丸と破魔射場、岩殿山とお伊勢山、高畑山と倉岳山、九鬼山と御前山）などがあり、それぞれを選ばねばならないためである。

第19回秀麗富嶽十二景の審査は本年1月20日、大月市役所3階委員会室で、全審査員立ち会いの元、午後1時30分定刻に開催された。この第19回の応募作品数170点。応募者数は32名、これは前年比作品数マイナス57点、応募者数マイナス11名であり、昨3月11日の東日本大地震の影響も大きく関係しているものと考えたい。大月市内応募者7名（マイナス3名）、県内5名（±0）、県外20名（マイナス11）である。

応募作品数は約4分ノ1の減少をみたが、作品の質は前回は上まわる充実ぶりで、審査は難航したが、約1時間で全26点を決定。最優秀賞は一昨年も同賞を獲得した南アルプス市の内藤均氏が栄冠を射止めた。続いて推薦2名は大月市の村上敏幸氏と東京都の高橋英子氏、作品は御前山と牛奥ノ雁ヶ腹摺山からの撮影であり、困難な場所からの栄冠であった。次いで特選3点は、やはり大月市の大戸康世氏と東京都の伊藤恵子氏、神奈川県秦野市の山下政明氏の3人であり、残り入選は20点、アトランダムに披露するが、村上敏幸氏が雁ヶ腹摺山の作品で、奈木正次氏が姥子山の富士で、池田浩樹氏が小金沢山、小谷哲朗氏が牛奥ノ雁ヶ腹摺山、大戸康世氏が大蔵高丸、井上儀宏氏が破魔射場、奈木正次氏

が2点目の入選を滝子山で果たし、愛澤和弘氏が笹子雁ヶ腹摺山、小池満雄氏が奈良倉山、高津秀俊氏が扇山で2点目を決め、村上敏幸氏も同様、百蔵山であった。

続いては大月市の加藤公男氏が岩殿山で、松坂の小谷加代子氏が、夫君についてお伊勢山で入選し、愛澤和弘氏が高畑山で2点目を、松本邦弘氏が倉岳山、権正光夫氏が九鬼山、次は高津秀俊氏が2点目を御前山で、さらに多治見市の瀬瀬浩恭氏が高川山、山下政明氏が清八山、そして谷ロ一只氏が本社ヶ丸でしっかりと締めた。

今回の応募作品数は、数こそ昨年より少なかったが、質的にははるかに上質であり、全体的にレベル向上が明らかに見てとれた。個々の応募者、また条件によつての作品の質の上下はまだ見られたが、以前のように構図や色彩再現、着眼点など格段に向上したといえよう。尚、個々の作品についてはそれぞれの批評を参考にされたい。

唯、残念なのは、応募者のほとんどがデータ記入が不十分であり、ことに使用レンズのF値の記入はゼロに近かった。これは撮影時のF値でなく、レンズ本来の開放F値のことである。来期はこのことも選評に入れることを実施する予定であるので、各自、しっかりと自覚して頂きたい。